

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第四號 第四十六卷

昭和十三年四月一日發行

論叢

ソロキンの文化的變動形式論

貨幣の本質とその價值

貨幣の本質について

共同體思想の國民的性格

時論

稅制整理と増稅

研究

職分と職業

貿易理論の前提

ダンピングの理論

近世絞油業の發達

說苑

明治初期の國內市場

産業構造の研究と政策

附錄

雜報：外國雜誌論題

(禁轉載)

文學博士 米田庄太郎

商學士 中山伊知郎

文學博士 高田保馬

經濟學博士 石川興二

經濟學博士 汐見三郎

經濟學士 澤崎堅造

經濟學士 松井清

經濟學士 岡倉伯士

經濟學士 住谷勇二

經濟學士 堀江保藏

經濟學士 田杉競

經濟論叢

第四十六卷 第四號 (通卷第貳百七拾四號)

昭和十三年四月發行

論

叢

ソロキンの文化的變動形式論

——社會的文化的變動の形式(三)——

米田庄太郎

- (一) ウォームの社會進化形式論と夫れの批判 (昭和十二年十二月掲載)
- (二) ソロキンの社會的文化的過程形式論と夫れの評價

I、ソロキンの社會的文化的過程形式論の概要 (前號及び本號掲載)

II、ソロキンの社會的文化的過程形式論の評價

(二) ソロキンの社會的文化的過程形式論と夫れの評價

1、ソロキンの社會的文化的過程形式論の概要

社會的文化的變動の形式

第四十六卷

四九九

第四號

一

(4) 方向の立場から見たる過程の線狀的な諸型、并に非線

狀的な、即ち循環的な及び變易的に再起反復的な諸型

既に述べし如くに、過程はもろ／＼の向きの諸方向を有するものである。そうして一の過程の存在を通じて、一の與へられたる方向の向き及び方向其物が變らないならば、其の過程の型は與へられたる方向及び向きに關する限り、線狀的であると云ひ得られる。

空間的方向に關しては、線狀性とは一の空間的中心から他の空間的中心へ、同一線に沿ふて進行する過程の單位の曲らない運動を意味する。

「時の進行中に文明の中心は熱帶地方より寒帶地方へ、北方に向ふて移動する」とか、「文明の流れは時の進行中に山嶽地から平原地へ下つて行く」とか云ふが如き敘述に於ては、社會的過程は時の進行中、とられたる空間的向きから根本的には全く曲らずに、一の空間的中心から他の空間的中心へ動くとして、或は放射するとして表現されて居るのである。

量的方向に適用されると、線狀性とは過程は其の存在の期間増大するか、又は減小するか、又は恒定的であるかを意味する。そうして時の進行中に人間の知力は益々増大するとか、迷信は益々減小するとか主張する様な理論は、總て過程の量的線狀性を認めて居るものである。

時間的方向に適用される場合には、線狀性は只過程は一時點から他の時點へ、つまり過古から現在へ、又現在から將來へか、又は其の逆へか、曲らない進行を持続すると云ふことを意味するだけである。そうして只時間的方向だけの線狀性は、特殊的に意味ある概念ではない。是れかゝる線狀性は、方向の立場から見れば、過程の一切の型、即ち線狀的型にも非線狀的型にも、適用し得られるからである。されど空間的及び其の他の諸方向と結

合する場合には、夫れは甚だ明亮な特殊的意義を有する。例へば過程の加速度或は減速度の如き概念に於ては、時間は必然的一要素にして、加速度とは益々増大するテムポを意味する、或は振幅及び種類に於て變らない變動の實現に於ける、時間の消費が益々遞減することを意味する。かゝる過程にありては、時間的線狀性が量的或は質的方向の線狀性と結合して居るのである。尙ほ又吾人が何時でも生産或は再生産され得る諸過程に對立させて、只特殊な一時點に於てのみ起り、反復或は回復され難い諸過程に就て考へる場合にも、時間的線狀性は特殊な意味を有するのである。

終りに質的方向に關しても、線狀性は完全には適用し得られない。抑々一の過程がA質から、夫れと大に異なるB質に移り行くか、又はA.B.C.D.等の種々なる諸質の一系列を通過して行く場合には、かゝる移行は線狀的でも非線狀的でもない。兒童期から成人期及び老人期への移行行きや、又はローマネスク建築様式からゴシック建築様式へ、又夫れからルネサンス建築様式への移行行きなどに於ては、其の系列は線狀的でも非線狀的でもなく、本質的に相互に異なり、そうして如何なる仕方にも、線狀性や非線狀性の概念とは連結して居ない質的諸状態の一連續である。總て此等の場合に於て、線狀性と云へばつまり質的諸状態の連續に於ける一定の齊一的順序を意味するものにして、そうして是れが即ち質的線狀性の概念が事實上有し得る唯一の意味である。と云ふのは、此等の質的諸状態の連續に於て、一定の質が進歩的に増大し或は減少する時には、かゝる線狀性は量的となるか、又は夫れと結合するかであるからである。されば線狀性が質的方向に適用される時には、夫れは只量的又は其他の方向と結合するに於てのみ、且つ意味の若干な特殊的蔭に對してのみ、意義を有し得るのである。

線狀性の概念が過程の四種の主要方向に適用される場合に、之れに賦與される一般的意味は以上述べしが如きものであると思はれる。そうして此等のもろくの線狀性が結合される場合に生ずる結果は、總合的或は累積的線狀性にして、夫れは例へば加速度及び減速度、膨脹及び收縮、純粹性の遞増及び遞減等々に於て見られるが如きものである。

却説線狀性其物は、過程の方向に結び附けて考へられると、單線的、振動的、螺旋的及び分枝的線狀性の四つの主要形式に分たれる。與へられたる方向の向きが、一の過程の存在を通じて同一であり、其の線的傾向から一瞬間も曲らないならば、其の過程は單線的である。併し主要な線的傾向は變らないが、與へられたる方向の向きが、時々夫れから曲る或は偏よる場合には、其の曲る或は偏よる仕方如何によりて、振動的或は螺旋的或は分枝的線狀性が現はれるのである。

今諸過程は本來再起的或は反復的であるが故に、方向の單線型を有し得ない。若し一の過程が其の存在を通じて單線的に進行するならば、夫れは變化、句切り、階段等々を有しない一直線の如きものであつて、全く節も、環も、ストップも有しない。かくて再起或は反復の可能性を全く有しない。要するに再起的或は反復的過程が成立する爲めには、主要なる線的傾向から如何様かの曲り或は偏りが、即ち空間的、時間的、量的或は質的方向の何れかの向きに於ける或變化が必要である。

再起的或は反復的諸過程に於ては、又各過程の繰り返される諸方面に於ては、線狀性は振動的なものか、螺旋的なものか、又は分枝的なものであり得るが、單線的なものではあり得ない。そうして振動的線狀性にありては、方向の向きの運動は變化すると、其等の變化は全く第二次的及び一時的なものである。即ち振動的線狀過程は短い期間夫れ的主要方向から曲つた後、又

もとの進行を取り戻し、かくて夫れの存在の全體を通じて、曲つては又戻り曲つては又戻り、續けるのである。尙ほ又振動線は量的、質的或は空間的方向、或は其等の方向の二つ又は總ての結合を意味し得る。

螺旋的線狀性は大に振動的線狀性に似て居る。そうして兩者の主要な差異は、つまり螺旋的線狀性は主要方向からの第二次的曲り或は偏りの生起及び性質に於ける一層大なる規律性、或は主要方向からの一切の曲り或は偏りに於ける一層大なる齊一性を含むと云ふ事實に於て成立する。

終りに分枝的線狀性は、幾多の枝に分れるが、其等の枝の最も多くは、著しき曲り或は偏りに拘らず、尙ほ主要な方向及び向きを固持して居る處の過程に於て、認められるものである。

再起或は反復の第一典型としての線狀的典型とは如何なるものであるかは、以上論述し來れる處によりて學ばれるが、次に其の第二典型としての循環的^{サイクリカル}典型を考察する。今此の典型は完全循環的と比較的循環的とに分たれ得る。完全循環的過程に於ては、與へられたる再起或は反復の最後の位相或は階段は、夫れの最初の位相或は階段に立ち戻り、そうして循環は再び始まり、前に通過せると同じ道を通過して行く。併し比較的循環過程に於ては、再起或は反復する過程の方向は、前の再起或は反復の系列の方向と、完全には合致しない。一の循環圈と他の循環圈との間には、或曲り或は或偏りがある。併し比較的循環過程は線狀型、殊に振動型及び分枝型とは異なりて、本來全く主要方向或は主要道を有せず、そうして只部分的に前の方向に戻るだけである。但し振動的及び分枝的線狀過程はかゝる主要方向或は主要道を有するが、併し夫れの再起或は反復に於ては、決して二度と同じ跡を踏んで行かないのである。

循環的過程も線狀的過程と同じく、四種の方法を有し得る。先づ空間的方向に就て考へるに、其の空間が幾何學的空間である場合には、一の過程が循環的であると云ふことは、夫れは圓形的に動き、且つ與へられたる循環圈の最終空間點は夫れの最初空間點と云ふことである。

間點と合致することを意味する。そうして完全循環過程に於ては一切の再起或は反復の空間的軌道は精密に同一である。是れと異なりて比較的循環過程に於ては、夫れは總ての部分に於て精密に同一であるのではないが、併し與へられたる循環圈の最終點は、夫れの最初點に戻るのである。

次に量的方向に就て考へるに、完全循環過程に於ては、各循環圈のもろゝの量的向きの曲線は、只其等の向きの繼續に於て同一であるだけでなく、各々の向きの振幅に於ても同一であるのである。要するに其の過程の一切の循環圈のもろゝの量的曲線は相重ね合はされると、精密に相合致するであらう。之れと異なりて、比較的循環過程に於ては、各再起或は反復のもろゝの曲線は、振幅に關しても、其他何れの關係に於ても、全くは同一であるのではないが、併し量的方向のもろゝの向きの主要なる繼續は變らない、そうして各再起或は反復の最終點は、量的に夫れの出發點と合致するのである。

次に質的方向に就て考へるに、完全循環過程にありては、其の過程の單位は各再起或は反復に於ける同じ諸位相或は階段を、一の齊一的繼續順序に於て通過するであらう。かくて與へられたる再起或は反復の最終の質的狀態は、最初の質的狀態と同一であり、そうして循環圈は再び夫れの曲らない、偏らない進行を始めるであらう。之れと異なりて比較的循環過程にありては、各循環圈に於て通過されるもろゝの質的狀態の繼續順序は全く變らず、又最終の質的階段は最初の質的階段に戻るが、併しもろゝの質的狀態は強度、純粹性の度合、濃淡の度合、及び其他の關係に於て、其の過程を通じて循環圈から循環圈へと精密には相應しないのである。

終りに時間的方向に就て考へるに、循環的反復にありては、過程の時間的方向は只他の諸方向と結合する時にのみ、意義を有するものである。そうしてかゝる再起或は反復はもろゝの循環圈の諸位相或は諸階段、或はもろゝの循環圈全體其物に關して、何れの種類の週期性であるにせよ、一の週期的時間律動 *periodical time rhythm* 例へば $1-2; 1-2-3; 1-2-3-4; \text{etc.}$ の律動を意味する。此處に週期性とは循環圈又は夫れの一階段、一位相が實現される時間は、何れの循環圈に於ても、又は何れの循環圈の他と相對應する同一の階段に於ても、變らないことを意味するのである。そしてかゝる意味に於て、時間的句切りは與へられたる循環圈の系列に於て、再起或は反復から再起或は反復へと繰り返して行く。さればかゝる規律的週期性に關して、過程は夫れの時間的方向に於て循環的であると云ひ得られるのである。そうして一の過程が一切の方向に於て完全に循環的である時には、夫れは絶對的に循環的となり、然らざれば或方向に於ては完全に循環的であり得るが、他の諸方向に於ては比較的に循環的であり得るか、又は全く循環的であり得ないのである。

却説是れまでに論述し來れる如く、再起的或は反復的過程に於ては、先づ二つの基本的な型或は典型が區別されるのであるが、吾々は更に第三の基本的型或は典型を認めることが必要であると考へ、之を變易的或は創造的に再起的或は反復的な型或は典型 *variably or creatively recurrent pattern or type* と稱したいと思ふ。夫れはつまり絶對的に同一的ではなく、そうして連續的諸階段は常に線狀的であるのでも、循環的であるのでもなく、又は不變的であるのでも、規律的であるのでもなくして、種々に變易する處の再起或は反復、即ち一の階段或は環に於ては線狀的にして、他の階段或は環に於ては振動的、第三の階段或は環に於ては循環的、其他の階段或は環に於ては曲線的等々であり得る處の、もろくの再起或は反復に適用されるものである。かくて此の型或は典型は、一切の過程型は必ずしも單一、不變な主要傾向を有するものではないことを指示するが故に、線狀論者の理論に背馳し、同様な仕方にて循環論者の主張をも否定し、そうして方向の變異及び變化に拘らず、再起或は反復の行はれて居ることを承認するに於て、單獨論者の説にも背馳して居るものである。夫れは夫れ自身の中に單獨論、循環論及び線狀論等の一切を包含して居るが、併し其等の何れをも只一要素として、即ち只歴史的或は社會的文化的運動の或過程、或は或方面に適用されるだけのものとして承認するので、決して歴史的或は社會的文化的運動の一切の過程或は方面に適用されるものとは、認めないのである。

されば此の變易的再起型或は反復型は、此等總ての概念の最も廣大な、又最も豊富なものである。夫れは一の歴史的過程全體或は總ての社會的文化的諸過程に、變易なしに追蹤されねばならない如何なる永久的傾向或は方向をも認めようとしなない。夫れは社會的及び歴史的諸過程は、常に一直線に沿ふて進行せねばならないとも、

又は螺旋狀的に、又は循環的に、又は何れかの單一な方向或は仕方にて進行せねばならないとも、主張するのではない。此の型或は典型の理論によれば、或社會的過程は全體的に、又他の社會的過程は部分的に、實際上一直線に沿ふて進行するが、併し夫れは只一定の限界内に於てであつて、其の限界を越へては、或場處では曲線的に、他の場處では不規則な振動に於て、其他の場處では波動狀及び其の他の種々な形式に於て進行するのである。要するに社會的文化的過程は、其の型に於ては生命其物と同様に多種多様であり、最高の人間の天才の活動と同等に豊富で、創造的である可きであるから、若し事實上、一切の社會的過程が一の理論家の制限されたる理性或は無理性が、進行させたがる様な只一的路、只一方向、只一の軌道型を進行して居ると云ふ程、創造的變異に於て貧弱であるとすれば、夫れは實に奇怪な現象であると云はねばならないであらう。

かくて變易的或は創造的再起型或は反復型は、他の二種の型とは異なつて、特に左の三點を強調するのである。第一點は今永久的な一の線狀的傾向と云ふ様なものは存在せず、又もろ／＼の方向は變化するものであるから、歴史的及び社會的諸過程は絶へず、元の主題或は元の主體の常に新しき變異、變易に従ふて行く。そうしてかゝる意味に於て、社會的及び歴史的諸過程は驚異を以て満たされ、夫れの全體に於て豫見されることは稀れである。又かゝる意味にて、歴史は全體として決して繰り返さず、全歴史的過程は夫れの存在の何れの點に於ても、一の單獨の一度的方面、恐らくは只夫れの豫見不可能性に於てのみ豫見し得られる一方面を有するのである。そうしてそうである限り、變易的或は創造的再起型或は反復型の概念は單獨論的歴史概念と一致して居るのである。併し既に述べし如く、單獨の一度的方面を有する諸過程は、全然單獨の一度的原料のみで織られて居るもの

でなく、再起的及び反復的諸要素をも有する。そうして其等の過程が單位に於てか、空間に於てか、時間^{リニアリスト}に於てか、此等の諸因素の若干數に於てか、現實に繰り返される其の範圍内に於て、變易的反復型の概念は、一切の過程を絶對的又は相對的に再起的反復的と見る循環論と共鳴し、又一過程の一部分に於て、且つ制限されたる期間内に於て線狀的傾向を認めることに於ては線狀論者の見地と合致するが、併し其等の人々の主要なる諸主張に對して、鋭く反對して居る。

第二點＝變易的再起或は反復の概念は、最も多くの社會的過程の線狀的方向に於ける限界の存在を強調する。是れが即ち此の概念が線狀論者及び循環論者の概念と根本的に背馳する點である。循環論者は與へられたる方向に於ける限界の存在を承認しない、或は方向は常に變はるが、併し全過程は同一の又は相似の圓周を繰り返して走ると主張せざるを得ない。然るに之れに反して、變易的再起或は反復の概念は、多くの過程は或期間夫れの方^{リニアリスト}向に於て何等著しき變動を示さずに進行するが、併し其の傾向は早晚一定の限界に到達し、其時には過程は一の新しき方向に轉ずるものなるを主張するのである。そうして此の事は、つまり歴史及び最も多くの社會的過程に於ける、一の永久的な主要線狀的傾向の存在の否定を意味して居る。全體としての歴史に關しては、夫れはまだ完成されて居ないのであるから、又將來は豫見し得られないのであるから、吾々は人類が導かれつゝある何等かの連續的主要傾向及び何等かの終極點が、存在するかどうかを知つて居ないし、又知ることが出来ない。更に吾々は社會的文化的生活の重要な諸方面の最も多くに於て、即ち經濟的、政治的、社會的組織に於て、藝術及び宗教に於て、道德に於て、政治的或は經濟的團體の諸形態に於て、家族及び其他の社會的諸組織に於て、哲學

及び倫理學に於て、科學及びイデオロギーに於て、かゝる傾向を見つけることが出来ない。否な之れに反して、吾々は或點に於ては、常に新しき、先行者とは質的に異なる、そうして何れの線狀的形式にも還元し得られないもろくの創造物を見、或點に於ては、連續する社會的諸過程が一の線狀的傾向ではなくして、其の方向に於ける轉向及び移動や、反復や、昇降や、接近及び退却や、諸種の再起或は再歸等を現はして居るのを見るのである。或過程は始めから今日に至るまで、線狀的方向を有つて居るとしても、かゝる過程は甚だ僅小であると思はれる。尙ほ又其の傾向は將來に於ても變らないであらうとは、確信され難い。

第三點 所謂內在的原因作用の原理 the so-called principle of immanent causation 即ち自己規制の原理を含蓄して居る。此の原理に従へば社會的文化的過程の單位が集結され統一化されて居る時には、過程の方向に於ける變動は、只外部的諸勢力の干渉によりて惹起されるだけでなく、又夫れはさほど重大なものでなく、根本的には過程其物の内部的諸勢力によりて、又單位の本性によりて惹起されるのである。要するに有機體の生命活動は、外部的事變或は外部的諸勢力の如何に拘らず、有機體の死亡を生ずるとまさしく同様に、統一化されたる單位に於て行はれ、一定の方向に於て進動する何れの社會的文化的過程も、此の活動其物の力によりて、過程の單位及び夫れの方法を變動させる「諸勢力」或は「諸原因」を發生するのである。換言すれば一の過程の何れの與へられたる方向も、夫れ自身の終りを齎らし、又他の方向によりてとり代はられるのである。

ソロキンは以上述べ來りし如くに、社會的文化的過程の概念を精確に規定し、又同過程の形式を詳しく分類したのであるが、彼は彼の大著作「社會的及び文化的動學」に於て、其等の過程の諸形式或はもろくの型に就て論究しようとする諸問題を、彼自

から左の如くに列舉して居る。「社會的文化的的生活は此等の過程のもろ／＼の型の何れに織り込まれて居るか。此等の過程のもろ／＼の型は總て社會的文化的的生活の中に現はれて居るか、若しそうであるならば夫れは如何なる割合に於て、又何れの諸分野に於てあるか。此等の型の何れのもろ／＼の文化及び時代の心性に於て特に支配的勢力を振ふて居るか、又夫れは如何なる理由によりてあるか。與へられたる文化の精神に於ける此等の型の各々の出現及び優勢に於て動搖或は變動があるか、若しあるとすれば、一の與へられたる概念即ち線狀的、或は循環的、或は變易的再起反復的概念は、何れの時期或は時代に於て、又如何なる理由によりて支配的勢力を振ふて居るか。」

尚ほソロキンは彼の「社會的及び文化的動學」全體の目標は、主として希臘羅馬文化及び西洋文化に於ける社會的文化的動搖或は變動（西紀元前六百年頃から現時に至るまでの大凡二千五百年間の變動に注意を集中して）を研究することにあると云ひ、更に其の取扱ふ主要なる諸問題を左の如くに列舉して居る。

(1) 希臘羅馬文化及び西洋文化は論理的に統一化され集結されて居たか。(2) 若しそうであつたとすれば、如何なるもろ／＼大前提を中心として、其等の文化は統一化され集結されて居たか。(3) 文化の the Ideational type, the Sensate type 及び the Mixed type の諸原理（但しソロキンは文化の典型を根本的に右の三種に大別するのであるが、其等の術語は簡単に邦語に譯し難い。彼はアイディアショナルと云ふ語を彼獨特の意味に用ひ、又センチメントと云ふ語は彼の新造語である）は、其等の文化の統一化の諸問題を解決する鍵を與へるか。(4) 若し此等の諸原理が其の鍵を與へるとすれば、此等の諸原理は觀察者をして、其等の文化を荷ふものの科學及び哲學、藝術及び道德、法律及び政治、經濟的及び社會的組織、心理及びイデオロギー等の主要なる諸形態をよく了解することを可能ならしめるか。(5) 其等の文化に於ける論理的意味的 (logicomaneingful) 此の術語もソロキン獨特の意味に解されて居るもの。統一化、集結化は因果的函數的統一化に伴はれて居たか。(6) 其等の文化及び夫れの主要なる諸區劃或は諸部門は、夫れの優勢的文化典型に關して、時の進行中不變的に存續して居たか。又は實質的變化を受けて居るか。若しかゝる變化を受けて居たとすれば、其等の文化は何れの時期或は時代に於て、主としてアイディアショナル、又はセンチメント、又は混合的、又は觀念論的（但しソロキンは混合的典型中に於て、彼自身の立場から見れば、觀念論的アイディアリスチック典型は最も勝れたるものと考へて居る）であつたか。(7) 此等のもろ／＼の變易が行はれて居たとすると、其等の文化に於ける主要なる波動及び交代は如何なるものであつたか。各文化典型は如何程永續して居たか。此等の文化典型の交代に於て、規律的な週期性が

觀察し得られるか。(8)此の過程に於ける其等の文化の諸部門間の關係はどうであつたか。其等の諸部門は總て同時に變動して居たか。或部門は他の部門よりもよく早く變動しつゝあつたのでないか。文化的諸變動の方向に於ける變動は、常に平行的であつたか、又は反對的であつたか、又は獨立的であつたか。(9)變動の「諸原因」及び諸因素は何んであつたか。

ソロキンが「社會的及び文化的動學」に於て、研究しようとする根本的諸問題は、右に述べしが如きものであるが、夫れによりて同著作の目標は大體上學び得られると思ふ。併し私が本論文に於て、是より特に批判的に考察したいと思ふのは、さきに述べし理由によりて、只彼の社會的文化的過程の概念の規定及び同過程の形式の分類だけである。